

## 第1節 | 導入

### アラビア語社会言語学：概要

前章では、アラビア語における正則変種と俗語変種との関係に関わるダイグロシアという概念について、特にその範例の1つであるギリシアの事例を取り上げ、解説を加えた。これを承けて、本節では、そのようなアラビア語のダイグロシアに関わり、ジェンダー偏差とは間接的にしか関与しないが、社会言語学的観点から重要である点、および、アラビア語社会言語学の概要を論議する。

まず、上でも示唆したように古典的な正則アラビア語と標準変種とは同一ではないが近似しており、また標準変種と口語変種との間にも「中間言語」(al-luġa al-wuṣṭā) が指定されうるなど、これらの諸変種は、ファーガソンが唱えた古典的(離散的)ダイグロシアというよりも、連続的ダイグロシアを構成していると現在では普通、考えられていることに注意したい(Rosenhouse and Goral, 2004: 843-844)。

たとえばVersteegh (2014 [1997]: 236, 243-245) によれば、エジプトでは、標準変種と方言との間に、al-luġa al-mutawassiṭa 「中間言語」、al-luġa al-wuṣṭā 「中間言語」、luġat al-muṭaqqafin 「知識人の言語」、‘ammiyyat al-muṭaqqafin 「知識人の口語」、Educated Standard Arabic、arabe médian などと呼ばれる中間的な言語を指定するのが一種の流行のようになっている<sup>243</sup>。これは、教養のあ

243 遡れば、たとえば、アワド (Lūs ‘Awad) が、その1969年の著作、*Tārīḥ al-fikr al-miṣrī al-ḥadiṭ* (Cairo: Dār al-Hilāl) のp. 383において、劇作家・小説家・思想家のタウフィーク・ハキーム (Taufīq al-Ḥakīm, 1898～1987年) が「中間語」の確立を呼びかけていたと述べていることを、岡崎 (2021: 巻末のp. 54、注129) が注記している。ハキームが、正則アラビア語でも俗語アラビア語でもない、両者の中間的な「第三言語」(al-luġa al-tālīṭa) をエジプトにとっての理想的な国語とすべきと主張したことについてはアミン (1999: 30-33) も参照。

る多くのエジプト人——他のアラブ諸国の話者たちと比較すると、これらの人びとは標準語を用いる時、標準語の一般的な構造は保持しつつ、語尾の格標示など（語末格変化／イウラーブ、曲用）を省略し、多くの方言形を比較的、自由に用い、口語的な発音をする傾向がある——そのような集団が用いるインフォーマルな標準変種を正当化する試み、つまり、階級的正当化のイデオロギッシュな試みのようであるという。

実際、ダイグロシアの「高位変種」と「低位変種」というファーガソンの2つのレベル、あるいは、正則アラビア語（フスハー）、近代標準アラビア語、中間言語、俗語（アミーヤ、アンミーヤ）という4つのレベルではなく、①クルアーンの読誦でのみ使われる正則アラビア語、②書記や、時にはフォーマルな会話で使われる近代標準アラビア語、③教養のある層のフォーマルな口語（‘āmmiyyat al-mutaqqafin）、④識字層のインフォーマルな口語（‘āmmiyyat al-mutanawwirīn）、⑤非識字層の口語（‘āmmiyyat al-‘ummiyyīn）、以上、5つのレベルを指定する論者もいる<sup>244</sup>。

さらに、この5レベル、特に上記の③～⑤に見られるスタイルと社会経済的階層との対応については、あまりに単純にすぎ、現実的妥当性を欠いているとの指摘もある。エジプトも含めアラブ諸国では、経験科学的な社会言語学的調査は殆ど行われていないのだが、実際に為された数少ない調査によると、

244 アミン（1999: 34, 213-244）によれば、(1) ファーガソンなどのダイグロシア・モデルに加え、(2) アミン自身などが主張する、「文語」（正則、および近代標準アラビア語）、俗語、中間言語から成る3段階モデル、(3) 4段階モデル、(4) 1970年代にバダウィー（El-Said Badawi / El-Sa‘īd Muḥammad Badawi, 1929～2014年）が主張した5段階モデル、(5) 1980年代にパーカラー（M. H. Bakalla / Muḥammad Ḥasan Bākallā）が提示した連続体（「スペクトロ・グロシア」）モデルなどがあるとされている。

このうち、(2) 「中間言語」についてアミン（1999: 256, 294）は以下のように述べている。すなわち、エジプトのアラビア語には、①特定の教養人の用いるフスハー（正則／近代標準アラビア語）、②一般大衆の用いるアミーヤ（俗語）、そして、③言語（エジプト語）ナショナリズム、中産階級識字層や近代化と結びついた言文一致的な言語変種である中間言語（「民衆語」）、以上の三種があり、したがってエジプトの社会文化的統一性を示すようなナショナルな標準語はエジプトには存在しない。

/q/ や /t/ の使用、動詞の相標示の使用、語順、格標示（曲用）などの社会言語学的変異体（variables）については、上記の①から⑤に向けて連続的な変化が見られる。したがって、両極に位置する①と⑤については独自のレベルを指定しうるが、中間的なレベル（②～④）については別個のレベルを指定できないこと——つまり、連続的ダイグロシアであること——が示唆されているのである。すなわち、この種の経験的調査では、たとえば /q/ と /t/ の分布について見ると<sup>245</sup>、以下のとおり、それぞれのレベルのインフォーマルなスタイルの数値と、1つ下のレベルのフォーマルなスタイルの数値とが概ね一致することを示す結果なども得られているという：

- (1) インフォーマルな近代標準アラビア語（ニュース、大学の文芸の授業などで使われる）では /q/ の比率は45%
- (2) 教養層のフォーマルな口語（大学の自然科学の授業）では44%
- (3) 教養層のインフォーマルな口語（教授間の内集団的な会話）では35%
- (4) 識字層のフォーマルな口語（庶民的なテレビ番組）では34%
- (5) 識字層のインフォーマルな口語（商店主間の内集団的な会話）では22%
- (6) 非識字層のフォーマルな口語（雇用主と被雇用者との間の会話）では23%
- (7) 非識字層のインフォーマルな口語（労働者間の内集団的な会話）では0%

他方、正則アラビア語と俗語アラビア語諸方言との間の言語的差異の概要は Versteegh (2014 [1997]: 133-137) などを参看されたい。（正則／俗語アラビア語と地理的分布との相関に関していえば、一般に、湾岸地域からレヴァントを経てマグリブ、モロッコに至るアラビア語圏全体において、東の地域方言は、西

245 上記の他の社会言語学的変異体についても基本的に以下と同様のパターンが見られるとされているため、ここでは割愛する。